

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：24403  
 研究種目：基盤研究（C）（一般）  
 研究期間：2009～2011  
 課題番号：21520153  
 研究課題名（和文） 現代イギリス・ブラック・アート運動にみる表象文化と視線をめぐるポリティクスの研究  
 研究課題名（英文） Study of the Contemporary British Black Art Movement and Politics around Culture of Visual Representation and the Gaze  
 研究代表者 萩原 弘子 (HAGIWARA HIROKO)  
 大阪府立大学・人間社会学部・教授  
 研究者番号：90159088

研究成果の概要（和文）：戦後の移民政策の結果、多民族国家となったイギリスで、既存の美術機構から周縁化されてきたブラック・アーティストに注目し、1980～90年代の「ブラック・アート運動」と呼ばれる動きとその後の推移を分析・考察することで、表象文化と視線をめぐるポリティクスを研究した。それにより、視覚表象文化が規範や社会関係（移民、人種等）の構築・解体の行なわれる現場であること、現代世界における移動の行為が表象文化形成にとって重要な意味をもつことを示した。

研究成果の概要（英文）：The study explores politics working around the gaze and culture of visual representation, focusing on fine art practices of British Black artists, who are of descent of post-war immigrants from the former colonies and have been marginalized by established art institutions. By examining the so-called Black Art movement in the 1980s and 90s and its aftermath the study shows that culture of visual representation is a site, on which the canon and power relations are being constructed and deconstructed, and that migrations are of great moment for the formation of visual culture.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学 芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：表象文化論

1. 研究開始当初の背景

1970年代以降の新しい表象文化研究がカルチュラル・スタディーズとして、また美術史研究として、それぞれに成果をあげていたことは1990年代からすでに知られていた。しかし、それぞれの成果を相互につないで視覚的な文化を研究することは、次に記すよう

に課題に留まっていた。

（1）表象文化を見る視線の社会的構築性を解明した1980年代イギリスを中心とするカルチュラル・スタディーズの成果は、とりわけ人種と視線をめぐるポリティクスを明らかにした点で意義深い。しかし映画とマスメディアに重点を置いた研究が多く、ファイ

ン・アートは主たる分析対象とはされてこなかった。

(2) 1970年代以来の英語圏アカデミズムで台頭してきた美術史研究は、人種、ジェンダーといった社会関係の反映を美術作品に読むことはしても、表象そのものがそうした社会関係を構築、再生産する現場でもあるとするカルチュラル・スタディーズの影響は一定程度に留まっていた。

他方で、現代イギリスのブラック・アート運動の全貌を明らかにする研究はまだなく、その研究の方法論はイギリスでも定まっていなかった。1980年代のイギリスで「ブラック」と言えば、アフロ・カリビアン、アフリカ人、南アジア人を指し、アメリカの「ブラック」とは違って、旧植民地からの移民を意味した。つまりアメリカにおけるブラック・カルチャー研究の成果をイギリスのブラック・カルチャーに適用することはできなかった。

そこで、戦後イギリスの移民系アーティストがファイン・アートの領域でした仕事を分析対象に据えて、20世紀末におけるカルチュラル・スタディーズと美術史研究の成果を踏まえて研究することで、上記(1)(2)をつなぐための一歩としたいと考えた。

1987年よりほぼ毎年訪英し、ブラック・アーティストの展覧会を見て、アーティストのスタジオを訪問し、関係資料を収集し、考察を重ね、その成果を著作として発表してきた。当時から20年以上が経過し、ブラック・アートと呼ばれる運動を折々の観察だけでない歴史スパンで考察することが、必要で可能であると確信された。

## 2. 研究の目的

現代イギリスのブラック・アート運動に焦点をあて、視覚表象文化の領域における社会関係(移民、人種、ジェンダー、階級)と視線をめぐるポリティクスを解明する思想史としてのカルチュラル・スタディーズ研究を行なう。

戦後の移民政策の結果、多民族国家となったイギリスで、既存の美術機構から周縁化されてきたブラック・アーティストに注目し、彼らによる制作、ならびにその展示と評論を考察して、次のことを明らかにする。

(1) 彼らの表現活動が、イギリス社会における人種、ジェンダー、階級に関わるこれまでの社会関係(その問題性を是正・克服しようとして提案される行政レベルの多文化主義も含めて)への挑戦であると同時に、西洋美術という規範的文化への挑戦でもあること。

(2) そこには、表象文化を見る規範的視線に対する批判があること。

(3) そもそも表象文化は、そうした拘束力

ある規範や社会関係の構築・解体・変更の行なわれるポリティクスの現場であること。

## 3. 研究の方法

上記の課題にとりくむため、本研究は次のような方法で進めた。

(1) 1980~90年代にイギリス各地で開催された一連のブラック・アート展の図録と、そこに参加したアーティストのモノグラフや評論、関連論考の系統的収集と、その分析、考察。

(2) 1990年代初頭に、多文化主義への対抗として「新国際主義」を標榜して始まった美術機構の出版するアーティスト・モノグラフや評論の系統的収集と、その分析、考察。

(3) アーティストとの面談、インタビュー。視覚資料を分析、考察するにあたっては、アーティスト自身が制作、展示、評論についてどう考えているかを知ることでも必要なので、アーティストと会ってインタビューを行なった。

資料収集とインタビューは、3度の訪英で行なった。その際に、1990年代に入ってロンドンで設立された新しい美術機構 Institute of New International Visual Arts (INIVA)等を訪問し、その活動の調査も行なった。

視覚資料の分析、考察は、1970年代以降にT・J・クラーク、G・ポロックといった美術史研究者が展開した、社会関係をつくりだす現場としての美術作品という視点を重視する方法によった。また言説資料の分析、考察は、イデオロギーの構成と機能に注目する、思想史的方法によった。分析、考察の過程で常に参照したのは、人種と視線をめぐるポリティクスに関する多くの論考があるS・ホール、K・マーサーの議論のスタイルである。

## 4. 研究成果

本研究では大きく分けて(1)~(3)について研究を行なった。明らかにした諸点は次のとおりである。

(1) 1980~90年代におけるイギリスのブラック・アート展について：

①ブラック・アート展のなかにも、地方行政によるエスニック・マイノリティ政策の一環として多文化主義を掲げて行なわれたものと、それより数年早い時期にアーティスト自身の発意で行なわれたものがあり、両者それぞれの言う「ブラック・アート」はかなり違っていた。

②1980年代半ば以降、労働党色の強い地方行政の反人種差別・多文化主義を標榜する文化行政の主導で開催されたブラック・アート展は、グループ展が圧倒的で、ブラック・アーティストの個展に公的機関が助成金を

出すことは稀であった。そのことじたいが制度的人種主義であるという批判を、アーティストたちは当初から言明していた。行政主導のブラック・アート展はやっと訪れた展示の機会であったので、彼らはそれを放擲することなく、批判しながら関与する道をとった。それは周縁化を打破するうえで、現実的かつ意味ある選択だった。

③アーティストたちの企図は、それまでの人種的ステロタイプ化と周縁化を打破し、既存の規範的な視覚表象文化を批判することだった。したがって、当時ブラック・アート展の主催者であった地方行政が標榜していた多文化主義は、アーティストにとってはむしろ不自由な枠組みであった。なぜなら、多文化主義と言えば主流でないアーティストの別名のようになっていたからだ。

④小さな地方行政が行なった小規模の展覧会では図録を作成しなかったことも多く、参加したアーティストの名前もすべてはわからず、運動の全貌を把握するのはなかなか困難であった。しかしロンドンという大都市にかぎった動きではなかったこともわかった。

⑤ブラック・アート運動のイデオログと目されることの多かったラシード・アリーンは、その所論において、終焉を遂げたはずの植民地支配が文化の領域では続いているという、いわゆるポストコロニアル的二重状況を早い時期に指摘していた。またアーティストが新しい制作の拠点を求めて国境を越えて移動することは例外的なことではなく、むしろ移動はモダニズム美術形成の基盤であると明らかにした。これらはアリーの思想的功績である。

⑥アリーンが企画し、1989年に開催に至った *The Other Story* 展は、非白人のアーティストによる作品を集めた展覧会であったので、一般にはそれまでのブラック・アート展の集大成のように言われていた。しかし実は、同展にはイギリスで言う「ブラック」以外のアーティストも参加しており、それまでのブラック・アート展の人種分離主義とは異なる展示構成となっていた。同展でのアリーの関心は、人種を含めてさまざまな境界を越えてモダンの創造を追究したモダニズムにあり、行政主導の多文化主義推進のためのブラック・アート展にははっきりと批判的であった。したがって、彼をブラック・アート運動のイデオログとするのは適当ではない。

(2) 1990～2000年代のイギリスで「文化的多様性」、「新国際主義」を掲げて活動した美術機構と、当該期間に行なわれたブラック・アーティストの展覧会について：

①1994年に設立された Institute of (New) International Visual Arts (当初は New が

入っていた。New が名称から消えても略記は変わらず INIVA)、1980年代後半に出発の Autograph Association of Black Photographers (Autograph ABP)、また2006年に名称と運営基盤を変更した Cultural Diversity (旧 African and Asian Visual Artists Archive, AAVAA) という3つの美術機構の活動のこれまでと現在までの成果は単純でない。その活動の思想的、文化的意味に対する批判にも注目し、それらの活動についての立体的な理解がなにより必要である。代表的な批判者であるエディ・チェンバース、リチャード・ヒルトンの指摘するように、主唱された「文化的多様性」、「新国際主義」の意味は実はひとつではない。

②それら新しい美術機構が課題としたのは、かつての「ブラック・アート」展の人種分離主義的傾向を克服すること、ファイン・アートの世界における移民系アーティストの周縁化を打破すること、さらには規範的な視覚表象文化を変革することであったが、どこまでそれらの課題を達成したかは、評価が分かれている。一定程度それらの課題を達成したと見る向きもあるが、「文化的多様性」、「(新) 国際主義」が、1980年代の「多文化主義」に代わって周縁の別名になっただけという批判は無視できない。

(3) 1980年代のブラック・アート運動から、90年代の「文化的多様性」、「新国際主義」を経て現在までに起きた、表象文化と視線のポリティクスの変化について：

①1980年代に開催されたブラック・アート展は、いずれもブラック・アーティストのグループ展で、1人あたり作品2、3点が展示される総覧展ばかりであった。そのタイプの展覧会は、1990年代に入るとだんだんと開催数が減り、1994年に芸術協会 (Arts Council) の全面的支援を得て INIVA が設立されると、総覧展に替わって、テーマ展が中心となる。その変化が、かつてブラック・アーティストたちが希求した、規範的でエリート主義的なアートの変革を伴っているかといえ、まだそういう状況は訪れていない。

②2000年代に入ると、1980年代でも比較的初期のブラック・アート展をふりかえり、再評価する展覧会が主流の美術館で行なわれるようになった。ひたすら周縁化されていた1980年代と比較して、変化を感じさせる事態である。

③1980年代以来、ブラック・アーティストたちは、彼らのこうむった周縁化を批判し、彼らが、現代を生きて表現する現代アートの担い手であるという社会的認知を求めてきた。そのなかで、それまで表象文化で力をもっていた規範の再考を求め、なかでも、文化形成における移動の重要

性という視点は注目すべきだろう。移動を理由として周縁化されていた彼らは、むしろ移動を現代世界における重要な経験とし、文化の混淆と創生の源泉とする視点への転換を提起した。そうであるなら、2000年代に入ってから1980年代ブラック・アート再評価の意味は、移動の重要性に関する認識の広がりを示すものと見ることができる。

④しかし2000年代に入ってから再評価には別の面もあると考える。テイト美術館のような主流の美術館に1980年代のブラック・アーティストの作品が展示されるのを見ると、かつての周縁化は克服されたように思われる。しかしそれは、ブラックも「イギリスのナショナルな文化」としてとりこむ、いわば帝国の求心力とも言うべきポリティクスが働いていると見することもできる。

⑤再評価の2面性は、まさに表象文化とそれを見る視線をめぐるポリティクスが終始動態のなかにあることを示していると言えよう。

#### (4) 口頭発表、発表論文について

2010年2月に沖縄県立博物館・美術館主催のシンポ「移民と芸術」、ならびに那覇市に立地する光画文化研究所から請われて発表した。沖縄という、移民送り出しの歴史をもつ地で行なったおかげで、その後の研究に有用な示唆を聞き手から得ることができた。特に現代の文化を研究するうえで、グローバルな移動に焦点をあてることの意義を実感した。

論文「1980年代英国ブラック・アート展と多文化主義の政治学」においては、当時のブラック・アート展に参加したアーティストの企図と、主催者が標榜する多文化主義の乖離を明らかにした。これにより、一般には、開かれた進取の考え方とされる多文化主義に疑いを投じた。

論文「*The Other Story* 展(1989年)再訪—英国ブラック・アートと多元的モダニズム美術史の展望」においては、行政主導のブラック・アート展に対する批判としてラシード・アリーが企画、選定した1989年の展覧会の意義と、残された課題を論じた。そのなかで19世紀以来のモダニズム美術の追究が、西洋に植民地支配された社会でもったインパクトの意味と、モダニズムの多元性というアリーンの論点の重要性に注目した。またモダニズムの展開において、アーティストたちの移動が重要な契機となったことを示した。

以上において、先に「研究の目的」で挙げた3点について明らかにした。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 萩原弘子、1980年代英国ブラック・アート展と多文化主義の政治学、黒人研究81号、黒人研究会、査読有、2012年、20-26頁
- ② 萩原弘子、*The Other Story* 展(1989年)再訪—英国ブラック・アートと多元的モダニズム美術史の展望、人文学論集、大阪府立大学人文学会、査読無、2012年、17-40頁

〔学会発表〕(計3件)

- ① 萩原弘子、1980年代英国ブラック・アート運動と、多文化主義の政治学、黒人研究会、2010年6月27日、沖縄国際大学(宜野湾市)にて
- ② 萩原弘子、移民と芸術—英国ブラック・アーティストのしごと、沖縄県立博物館・美術館シンポ、2010年2月6日、沖縄県立博物館・美術館(那覇市)にて
- ③ 萩原弘子、多文化主義と写真表現の現在—イギリス・ブラック・アート運動の定点観測から、光画文化研究所研究会、2010年2月5日、沖縄メディアアートセンター(那覇市)にて

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

萩原 弘子 (HAGIWARA HIROKO)

大阪府立大学・人間社会学部・教授

研究者番号：90159088

##### (2) 研究分担者 なし

##### (3) 連携研究者 なし